

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(13)

リレー随筆

おかひじき

(山形県立園芸試験場野菜部 かわむらけいぞう 川村啓造)

はじめに

おかひじきは、‘シャキ’とした独特の歯ざわりに加え、鮮やかな緑色と繊細な形が特徴の野菜である。栄養面でもカリウムやビタミンAをはじめとして、 B_1 、 B_2 およびCも多く、機能性食品としても人気が高まっている。

食用とするのは、若く軟らかい茎葉部で、茹でたものをからし醤油あえたものは、おかずや酒のつまみとして逸品料理である。その他、しょうが醤油、からし味噌にもよく合い、最近ではサラダ、天ぷら、炒め物、汁の実などにも使われている。

その消費は県内に限られていたが、消費宣伝の実施や周年出荷体系が確立されたことから、京浜等にも出荷がなされている。

特性

アカザ科に属する1年草である。分布はシベリアから中国、ヨーロッパに及び、わが国でも、各地の海岸砂地に自生している。若い葉や茎は軟らかいが、老化したものや花を着けるようになると葉や茎は硬くなり、葉の先端はとげ状になる。葉は濃緑色、円柱形、多肉質で、長さが2~6cm、ただし、生長点まで花を着けるようになると、生長点に近いものほど小さく、正三角形の形に変わる。

花芽分化には日長が関係し、14時間以下の短日であればあるほど早く分化が始まる。花は各葉腋に1個着き、淡緑色で花弁がない。長日下の春から初夏に播種した場合は、約1m四方に株が広まり、秋から冬



出荷期のおかひじき

の短日下にあつては、ごく小さいうちに花ができて、極端な場合には1cmそこそこで伸張が停止するものもみられる。種子には休眠期間があり、その期間是一定ではなく、栽培条件や年次によって異なる。発芽適温は20~25°Cとされる。

山形園試の生い立ち

山形県立園芸試験場は、園芸作物の振興と発展を図るため、昭和39年に農業試験場より独立発足した。

所在地は、“さくらんぼ”で全国的に知られる寒河江市で、県都山形市から北西約13kmに位置する。設立当初は、野菜花き、果樹の2課であったが、昭和46年環境課が設置され、その後数回の機構改革が行われ、さらに、昭和60年代に入って、果樹をめぐる輸入の自由化、産地間競争の激化および消費の多様化など内外情勢の変化に伴い、育種およびバイオテク分野の育種部および先進技術開発室が設置されている。平成4年野菜花き部が分割され、野菜部と花き部が設立され、現在1室、5部制となっている。

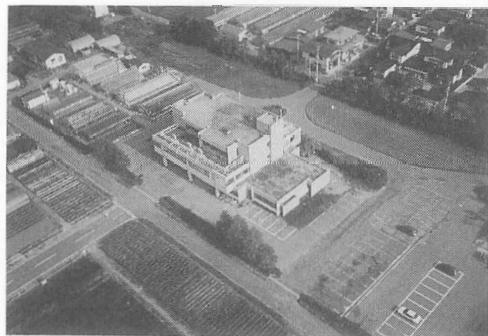
主な試験研究としては、果樹では、優良品種の育成・優良品種の選抜、健全な樹体管理、生産安定、省力低コスト栽培技術、わい化栽培、結実確保技術、生育診断技術、病害虫防除技術の開発が行われている。

また、野菜および花きでは、優良品種の育成・選抜、産地基盤確立のための生産技術の開発、新品目・新作型の開発、省力低コスト栽培技術、施設の高度利用技術や新食糧法施行に伴う水田農業の変化に対応できる生産技術開発など広い範囲にわたっており、多くの注目すべき成果が得られている。

おかひじきの試験研究の取り組み

○特性に関する試験

休眠打破には低温処理(0~10°C 2週間)が有効で



園芸試験場

ある。

発芽年限は種子の貯蔵方法により異なり、自然温湿度の室内では採種翌年の梅雨期までであるが、低温(0℃)貯蔵では採種後1年半にも及ぶ。

花成開花は短日ほど、そして適度な温度や施肥量が与えられ生育が促進されるほど早まるが、長日下に移されると花成開花は抑制される。しかし、長日でもある期間を経過すると開花することから、相対的短日植物とみられる。

○周年栽培に関する試験

短日下における効果的な電照方法は、真夜中1時間の光中断で、照度は10 Lux以上がよい。

○安定生産に関する試験

露地栽培における施肥量は、10 a当たり20 kgぐらいが適当であり、無機態-N量で30~45 mg/100 g乾土が望ましい。

生育に良好なpHは、5.3~8.0範囲と思われる。

○高冷地秋どり栽培試験

播種期は6月上旬から7月中旬まで可能であった。播種方法としては、まき床m²当たり40 mlの種子を溝切り条播するのがよい。発芽率の向上を図るためには、本葉2葉期まで寒冷しゃ被覆の効果が高い。

○べと病菌生態と発生実態調査

産地での発生は、露地よりもハウス栽培に多く、発生時期は、ハウスを密閉気味に管理しやすい5~6月と9~11月ごろに多発する。

主として葉が侵され、はじめ水浸状になるがはっきりした病斑はみられない。のちにその部分に灰色の分生胞子と分生子柄を生じる。やがて葉は褐色から黒褐色になり多湿な状態では溶けてくる。通常下葉に発生が多く、激発園場では上位葉まで発病する。樹枝状の分生子柄と分生胞子が多数観察される。分生子柄は無色で隔膜を欠き、長さ150~850 μm、2~4回分枝する。分生胞子は単胞、無色でレモン形をして乳頭突起



出荷荷姿

がなく、大きき17~44×12~22 μm(平均35.0×17.4 μm)で発芽管を出して発芽する。

アカザ科植物に対する接種試験では、おかひじきとマツナに寄生性がみられたが、アカザ、テンサイ、ホウレンソウ、フダンソウには寄生性がみられなかった。

以上のことから、本病菌は *Peronospora* sp. と考えられるので、病名をべと病と提案した。

産地動向

青葉氏らによると、栽培の起こりは、江戸時代初期ごろに最上川を船便で内陸へ伝えられ、現在の南陽市で栽培が始まったとされている。

平成4年度の県内の栽培面積(野菜生産状況表式調査:山形県農林水産部農蚕園芸課調べ)は、約22 haで、主な産地は南陽市、山形市、東根市などである。県外では、長野県と静岡県で小規模ながら産地化がなされている。

本県では、年々施設による栽培割合が増加し、周年出荷がなされつつあるものの、依然として4~5月出荷割合が多いことから、さらなる作型分化による周年出荷体制の推進を図ることが急務である。